ハンガリー事件 60 周年記念シンポジウムの御案内

本年は 1956 年のハンガリー事件から 60 年目に当たります。

60 周年とは、ご存知のように、とりわけ大きな節目です。
すなわち人間ならば還暦に当たり、まさに古きを温ねつつも、同時に将来への展望を構築しようと試みる、大切な画期に当たります。60 周年に当たる本年 2016 年の 12 月 23 日に「ハンガリー事件 60 周年記念シンポジウム」を東京で開催いたします。

その目指すところを、三種の参加者を設定し、ご案内いたします。実は私のような冷戦期に育った世代にとってハンガリー事件とは、まさに鮮烈な同時代的歴史体験でした。しかし冷戦が終結して早や四半世紀が経過し、若い世代にとって冷戦はもとより、ハンガリー事件、プラハの春、ポーランドの連帯運動、つづく体制崩壊など、まったく実感の伴わない過去の事象に映るのかもしれません。にもかかわらず、ハンガリー事件が今の我々に語りかけるものがあるとしたら、それは何なのでしょう。

三種の参加者設定、すなわち
１）ハンガリー研究者にとっての 56 年事件
２）広く全東欧研究者にとってのハンガリー事件
３）さらに世界史における大転換期としての 56 年事件
に沿って、それぞれご説明をします。
１）まずハンガリー研究者に参加を呼びかけます。56 年事件はハンガリー研究者なら誰しもが一再ならず立ち返るべきテーマと言えます。政治体制が変わるたびに「悲劇」、「革命」あるいは「反革命」と同事件に対する呼び方は変わってきましたが、ハンガリー研究者であるあなたは５6 年事件にいかなる認識を抱いておられるでしょうか。近年は研究の個別専門化が進んでいますが、しかしハンガリー研究者にとってハンガリー精神の探求は、いかなる時代、いかなる分野を専攻するにしても、根源的な課題であると考えます。
２）あらゆる東欧研究者に呼びかけます。56 年事件の後に、東欧ではほぼ 10 年ごとに国を移しつつ、幅広い大衆運動が歴史のうねりのように繰り返され、最終的には 1989 年の連鎖的な体制崩壊に至りました。そこには時と空間を共有してきた「東欧」という地域があります。東欧の人々は 56 年事件をどう理解し、

また共有したのでしょうか。本シンポジウムに幅広い東欧研究者が参加し、各自の専門地域から自由で活発な討論を行なってくださるように期待します。
３）あらゆる世界史的視点に立つ参加者に呼びかけます。56 年事件当時、世界は東西に分断されていましたが、超大国ソ連に挑んだ小国ハンガリーの闘いは東西を超えて世界に大きな衝撃を与えました。日本ではこの 56 年事件の衝撃の中から、東欧を知りたいという戦後第一世代の東欧研究者が育ちました。また、政治体制を超えた新しい大衆社会論が、56 年事件を機に始まったと言われます。60 年を経た今、東欧も大衆社会も曲がり角にきており、これは我々自身に思索を促しております。

56 年事件を過去の歴史とみなすことは妥当でしょうか？例えば、現代の優れた経済学者エマニュエル・トッド氏は、社会主義ハンガリーにソ連崩壊の予兆を見て取り、執筆の着想を喚起され、さらに今はブリュッセルと一線を画す東欧の背景に 56 年事件を見ているようです。

あなたは世界史と 56 年事件をどのように語りますか。どのような視点からでも大歓迎です。広く皆様方の御参加をお待ちしています。またごく若い世代にとっては、基礎的な論点の把握や検証の場になると思いますので、臆せず御参加ください。自由に語りあおうではありませんか。

開催日時：2016 年 12 月 23 日（金）午前 10 時から午後 6 時
開催場所：早稲田大学早稲田キャンパス 26 号館 302 教室

報告を御希望の方は以下の大会連絡先にご連絡ください。無論、御参加は自由で、事前登録は要りません。
なお、このシンポジウムはハンガリー学会年次大会の一環として開催されます。

大会連絡先：tdkiio@gmail.com　（家田修、飯尾唯紀、中澤達也）
シンポジウム主催者連絡先：ieda@slav.hokudai.ac.jp（家田修）
共催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター